

『マヌ法典』に見る浄・不浄観について

中 村 裕

『マヌ法典』
に見る浄・不浄観について

古代世界においては神に対する畏怖の念には多くの民族にとって共通するものがあり、同時に各民族には様々な不浄観とそれを清める固有の文化が育くまれてきた¹⁾。紀元前 3000 年頃に始まったと見られるインダス文明では地母神のほか樹神や動物崇拜が行われ、こうした神事と関連して身を清めるため大きな水浴場が作られ、沐浴が行われていた²⁾。紀元前 1500 年頃にはアーリヤ人が北西インドからガンジス河上流地域に侵入し、原住民であるドラヴィダ人などとの接触が始まったが、アーリヤ人にとって異民族は異なった習慣を持ち、彼らとの接触は穢れを生じると恐れていた³⁾。インドにおけるこうした異民族に対する不浄の意識は後に見るカースト制度の原点となり、同時にヒンドゥー教世界において様々な浄・不浄観を形成するに至った⁴⁾。

本稿は、『マヌ法典』に記載される浄・不浄の具体的な内容を整理するとともに、それらがヒンドゥー教徒の身分階級や生活期とどのように関連するかを探り、古代インド社会の特徴的な構造の理解を深めることを意図する。

1. インドの古代文献と『マヌ法典』の位置づけ

インド最古の天啓聖典（śruti）であるヴェーダ文献は宇宙及び人間社会の秩序としてのダルマの概念を中核に据えた儀礼体系を記したものであり、その後のヒンドゥー教正統思想の淵源となった。とりわけヴェーダ文献のうち讃歌を記した『リグ・ヴェーダ』は、インド・アーリヤ人がガンジス河上流に定着した紀元前 1000 年ごろまでに編纂されたものであり、ここではダルマが宇宙の秩序の中で神々の行動様式や機能を決定する原理として位置づけられている。

しかし、時代と共に宇宙の秩序を支配するダルマの概念は人間社会における行動規範や倫理感へと発展する⁵⁾。当時の社会における生活様式や宗教儀礼は紀元前 6 世紀以降に編纂されるダルマスートラ及びダルマシャーストラ（これらは総称して聖伝書（smṛti）と呼ばれる）に現れる。前者はヴェーダ祭式の補助文献として成立した。祭式はブラーフマナ祭官が神などの超越的な存在と係わる行為であり、祭式に参加する人々は浄なる状態にあることが要請された⁶⁾。一方、ダルマシャーストラはダルマスートラよりも後に作られたものであり、祭式から枠組みを拡大し社会全般を対象としている。『マヌ法典』はこのダルマシャーストラの一部を構成する。

ヴェーダからダルマスートラへの展開に伴いダルマの力点は祭式中心の世界秩序から人間社会の行動規範へと移行してきたが、ダルマの価値体系の中核は「浄」の世界であった⁷⁾。また、このダルマ実践の目的は、来世での幸を得ることであり、厳しい修行や禁欲主義と相俟って解脱へ向かうことであった。ここで特に、祭式との関わりにおいては日常的な清浄の保持への配慮が必要とされた。必ずしも伝統的なヒンドゥー社会では万人に共通した普遍的なダルマがある訳ではなく、それぞれの属する社会階層や人生段階に応じて異なった行為規範が要請された。本稿ではこの社会を「ダルマ世界」と呼ぶことにする⁸⁾。

なお、『マヌ法典』の成立は紀元前2世紀から紀元後2世紀の間⁹⁾であり、この頃までにヒンドゥー社会の特徴である四身分制度（ヴァルナ¹⁰⁾, varṇa）及び人生の4つの段階（アーシュラマ, āśramas）の概念は確立していた。これらの社会制度については次節以下で概説するが、『マヌ法典』が成立する以前の文献群ではブラーフマナを中心とした記述であったのに対して、『マヌ法典』では王の活き方にも力点が置かれ、ヴァイシャやシュードラについてはわずかな言及に留まる。また、アーシュラマに関しては学生期に加え家住期のダルマが詳述される。

2. ヴァルナ体制

古代インド社会では、前二千年期にパンジャブ地方を経て侵入してきたアーリヤ人の定着により氏属制農村社会が形成された。当初見られたアーリヤとダーサの主従関係は、後に明確にされてくるヴァルナ体制の萌芽であったと考えられる。やがて、社会経済的基盤が牧畜から農耕に移行し同時に都市への定着化が進み、階層も社会的機能に従って細分化され、四身分で構成されるヴァルナが固定化した¹¹⁾。この四身分についてはインド最古の聖典である『リグ・ヴェーダ』(RV X.90.12)に、

「彼（プルシャ）の口はブラーフマナになりき。両腕はラージャニアとなされたり。彼の両腿はすなわちヴァイシャなり。両足よりシュードラを生じたり¹²⁾。」

と記載されている。同様の記載は『マヌ法典』(1.31)¹³⁾にも、原人プルシャを創造主ブラフマンに代えて、

「かのブラフマンは諸世界の繁栄のために、彼の口、腕、腿及び足から、それぞれにブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラを生じさせた。」

が見られる。

『マヌ法典』にはこれら四身分の職務や使命について、以下のように記述する(1.87-91)。

- (1) ブラーフマナ（司祭者）：ヴェーダの教授と学習、自らのための祭祀、他人にための祭祀、贈物、布施を受けること
- (2) クシャトリヤ（王、武人）：人民の保護、贈物、供犠、ヴェーダの学習、感官の対象への無執着
- (3) ヴァイシャ（庶民、主として農民）：家畜の保護、贈物、供犠、ヴェーダの学習、商業、金貨業、農耕
- (4) シュードラ（隷民）：上位三身分に対して妬むことなく奉仕すること

また、インド古典に見られるヴァルナ制度の共通する特徴としては、①四身分の社会的な序列は、ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラの順とされており、それぞれが世襲制であった、②男性は自分と同等かより低いヴァルナの女性との結婚が許され、逆は許されるべきでないとされていた、また、③四身分には上述の明確な職能的分化が行われていた、などが挙げられる¹⁴⁾。

こうした四身分のヴァルナ制度のうち、上位三身分とシュードラとの間には社会的機能上に大きな格差が設けられていた。前者は一定の年齢に達すると、ヴェーダの学習を始めるためのいわば第二の誕生としての儀式である入門式（upanayana）を受けて再生族（dvija）となる。この時点で親から受け継いだ罪がすべて清められ、清浄なダルマ世界の成員となることが許された。一方、シュードラはヴェーダを詠唱することはおろか、ヴェーダを聞くことすら許されなかった。また、戦争を敢行したクシャトリヤ及びつねに生産に従事していたヴァイシャが多大な時間をヴェーダの学習に当てていたとは考えられず、再生族

という場合、多くはブラーフマナを意味した¹⁵⁾。入門式を受けるのは男性に限られ、一方、女性の社会的地位は低く、時にはシュードラと同等に扱われた¹⁶⁾。

3. アーシュラマ

アーシュラマは四住期のことで、古代インドにおけるヴァルナの上位三身分の理想的な生き方を示す基本的な社会制度である¹⁷⁾。以下にアーシュラマ制度の概要を紹介しておく。

ダルマーストラ¹⁸⁾には、家長、学生、ムニそして林住者¹⁹⁾の四住期が記載される。ここで家長が最初に置かれているのは他の住期よりも重視されていたからである。ダルマーストラより後に成立した『マヌ法典』では基本的に、学生(brahmacārī)、家長(gṛhastha)、林住者(vānaprastha)、遍歴者(parivrājaka²⁰⁾) (6.87)の順に人生の段階を踏むことが理想として掲げられる。学生期には、師のもとでヴェーダの学習とダルマの修得に専念し、人生の第二段階には、結婚して家住期に入り、祭祀や家長としての社会的義務を果たす。林住期には、家を捨てて森に入り禁欲・苦行の生活をし、そして、最終的には世間に対する一切の執着を捨て遍歴者として遊行期を送る。

『マヌ法典』では、四住期のうち家長が最もすぐれているとされる。家長以外のアーシュラマの日常生活は家長に支えられている(3.77-78, 6.89-90)ことがその理由である。同時に、家長の重要な任務として先祖の霊に対しては子孫を残し、また、神々に対しては供儀をとり行うことなどにより生得的な負債(r̥ṇa)を返すことが挙げられる(6.35-36)。

シュードラを除く上位三身分は学生になるための入門式を経てはじめて各ヴァルナとしての義務と権利がそなわる。学生期を終えると、伝統的な生き方としては家長になるものとされたが、ダルマーストラの時代では、必ずしも各アーシュラマは段階を追って進めていくことが前提とはされておらず、学生期以降は自由にアーシュラマの選択が許されていた。

なお、これらのアーシュラマの期間中にダルマ、アルタ、カーマの人生の三目的を獲得し、そして最終的には生死の輪廻を脱し、解脱に到達することが究極の目標とされた。ヴァルナ制度が身分ごとに全般的な義務や職業を規定するのに対して、アーシュラマ制度は解脱に向かう個々人の生き方の選択肢を示している。

なお、ダルマーストラの時代においてはアーシュラマの考え方はなかった。この制度の成立は紀元前後のことであり、文献としては『マヌ法典』において初めて見出される²¹⁾。

4. 『マヌ法典』の浄・不浄

不浄は誕生及び死や罪を犯すなどの特定の行為によってもたらされるが、これらの汚れはそれぞれの内容に応じた一定の期間を置いて清めの行為により除去することが可能であった。また、人体からの排泄物あるいはシュードラのように無条件に不浄とされるものがある一方で、王や誓戒を実施中の学生など、本質的に清浄と看做されるものがある。この節では、『マヌ法典』に記載される浄・不浄の具体事例及び清めの手段などについて分類し概観する。

<誕生によってもたらされる不浄>

バラモン社会において誕生は、死と同じく汚れや不浄であるとされ、一定期間の後に清めの儀式が必要とされた。新生児は両親の罪を受け継いで生を得るので誕生もまた不浄であると考えられた。誕生では特に両親がその汚れを有し、父親は沐浴によって清浄となる（5.62）。母親の清浄手段についての記載はないが、サマーノーダカ親族²²⁾は三昼夜で清められる（5.71）。

＜死によってもたらされる不浄＞

亡くなった人の身分及び当事者と死者との関係などにより不浄期間や清めの儀式が細かく規定される。一般に不浄期間は十日あるいは三日で終わり、沐浴が共通した清めの手段とされるが、様々な例が示されている。

死者を出したサピンダ親族²³⁾あるいは死体に触れた者は通常十日間不浄とされる（5.58,5.64）が、階層別では、ブラーフmanaは十日を過ぎたときに清められ、クシャトリヤは十二日、ヴァイシャは十五日、シュードラは一月を要す（5.83）とヴァルナによる差異が設けられている。師の死による汚れは三日間であり（5.80）、師の葬儀を行う学生、死体を火葬場まで運ぶ者は十日間不浄となる（5.65）。自国の王の死は太陽あるいは星の光が見える間のみ不浄であり（5.82）、国民の服喪期間は半日に留まる。

幼児期の死に関しても細かい規定がある。流産の場合は胎児の月数の昼夜が不浄となる（5.66）。結髪式²⁴⁾前の男児の死は一昼夜、結髪式後の場合は三昼夜が不浄となる（5.67）。二歳未満の子どもの死に際しては、村の外に火葬せずに埋葬し、三日間の断食を行うことで清められる（5.68-69）。

また、死者に水を捧げる者は三日間不浄となる（5.64）。同僚の学生の死は一日の断食で清められる（5.71）。結婚式は清めの主要な儀式（samskāra）の一つ²⁵⁾であるが、婚約を済ませ結婚式前の花嫁の死により、花婿、彼の親族、花嫁の父方の親族は三日間不浄となる（5.72）。この三日間は肉食を絶ち、塩を使わない食べ物を食し、沐浴をし、さらに、地面に一人ひとり離れて寝なければならない（5.73）と詳細に亘る規定が設けられている。

親族や関係者の死による不浄期間の終了後に行われる清浄手段も様々である。清めには所定の儀式を行った後に各ヴァルナに定められ天職に関係する代表的な事物に触れることにより清められる。すなわち、ブラーフmanaは水、クシャトリヤは馬、象、戦車などの搬送具及び武器、ヴァイシャは突き棒あるいは手綱、シュードラは杖である（5.99）。また、自らの意思で死者に付き従ったときは、衣服のまま沐浴し、火に触れ、酥油を食することで清められる（5.103）。

＜特定の行為がもたらす不浄＞

日常的な行為のうち不浄をもたらすものも多い。食後の口中の残渣物（4.75）、睡眠中の射精（2.181, 5.63）、不浄な人との食事（3.183-186）、性交（5.63, 5.144）などのほか、不浄なものを見たり（5.86）、チャンダーラなどの本来的に不浄な人に触れたり（5.85）することにより汚れを蒙り、清めが必要とされる。

これらの清めの手段も様々であるが、一般には、口を漱ぐ、太陽の礼拝、聖句の低唱、沐浴などがある。また、不浄な共食仲間からもたらされる汚れに対しては、清めを行いうる者としてすべてのヴェーダ及び支分²⁶⁾に通じた者など、十一種の人々が挙げられている（3.183-186）。不浄なものを見たときは、水を吸った後、注意深く最善を尽くして太陽に関する聖句（RV 1.50.1 以下）及び清めの聖句（パーヴァマーニー, RV 第9巻）を低唱するように規定する（5.86）。また、睡眠後、くしゃみをした後、食べた後、唾を吐いた後、嘘を言った後、水を飲んだ後、勉強しようとするときなどは、注意深く水を吸い（5.145）、吐いたときは、沐浴して酥油を食す（5.144）と記される。

人体からの排泄や分泌物は生得的に不浄とされ、とりわけ排尿・排便後には清めが必要とされる。小便のときは土を用いて男根に対して一度、大便のときは尻に対して三度、片手（左手）を十度、両手を七度清める。これは家長に対する清浄法であり、学生はそれの二倍、林住者は三倍、遍歴者は四倍とされた（5.136-137）。

<罪に対する清め（贖罪）の方法>

浄の維持と不浄の排除を基本理念とする古代インド社会では、罪は汚れや不浄物と同様に徹底的に排除されるべき対象であった。すなわち、あらゆる罪は実体的な一時的付着物と看做され、贖罪（prāyaścitta）によりその罪を取り除き、浄の世界へ復帰することが求められた。ただ、この贖罪は、罪の償いにより一定の刑期を終えることで放免されるのではなく、罪を犯すことにより付着した汚れ・不浄を除去することを意味し²⁷⁾、これによりダルマ世界への復帰を可能とした。

『マヌ法典』では、罪は大罪（mahāpātaka）と準大罪（upapātaka）とに大別し、多数の具体的な罪とその贖罪方法を詳述する²⁸⁾。これらの罪を犯した者は清めのための贖罪が不可避とされた（11.54）。また、罪状の審理・裁判は人民の守護と併せて王の重要な責務の一つになっているが、王による訴訟の審理には学識あるブラーフマナを同席させていたことが『ヤージュニャヴァルキヤ法典』（YV 2.1）に記載される。

大罪には、ブラーフマナ殺し、スラー酒を飲むこと、黄金泥棒、ゲルの妻と交わること、及びこれらの罪を犯した者たちと交際することの五つが挙げられる。特に、ブラーフマナ殺しの贖罪に関して多くが記される。たとえば、森の小屋で乞食による施物を食し12年間²⁹⁾ 過ごすこと（11.73）、あるいは、ブラーフマナは正義（ダルマ）の根であり、クシャトリヤはその先端であるから、大地の神々（ブラーフマナ）及び人々の神々（クシャトリヤ）の会する場所で自らの罪を告白し、馬祀祭³⁰⁾の最後に行われる沐浴を済ませるとき、その者はブラーフマナ殺しの罪から解放される（11.83-84）。また、知者の言葉は清めの道具とみなされており、ヴェーダを知る者（ブラーフマナ）三人が罪の完全な消滅を宣言することでも清められた（11.86）。以上の規定は、ブラーフマナ殺しが悪意をもってなされたのではない場合であり、意図的な場合には終生汚れを除去することができないとされる。

黄金泥棒やゲルの寝台を犯すことの大罪は基本的に死をもって清められて、来世に向かうことになる（11.101, 11.104）。ただし、ブラーフマナが犯した大罪に対しては、王はブラーフマナに死を命ずることはできないので、苦行のみが科せられた。

準大罪には数多くの事例が示され、その清めの手段も多岐に亘る（11.109-266）。準大罪の事例には、牛殺し、牛以外の動物を害すること、誓戒を破る学生、禁食を犯すこと、黄金以外の盗み、禁止される女との性交、パティタ³¹⁾との交際などが挙げられる。準大罪に対する贖罪は多彩であるが、事例として牛殺しの贖罪を示しておく（11.109-118）。牛殺しは剃髪し、殺した牛の皮をまとい、ひと月大麦の煮汁を飲み、牛舎に住む。その後、二ヶ月間は感官を抑制し、人工塩を使わない食事を四度目毎に食し、牛尿で沐浴する。牛の世話をし、牛が立っているときは立ち、歩むときは従って歩き、坐るときは坐る。また、苦しむときなどはあらゆる手立てを使って救い、自己のことは顧みず最善を尽くして牛を守る。こうして三カ月間の誓戒を完遂した後、ヴェーダを知るブラーフマナたちに牡牛一頭と牝牛十頭を与えることで罪から解放されるのである。

準大罪とその清めについて他の事例も多くあるが、ヴァルナ及びアーシュラマに関係するもののみを以下に示す。牛殺しのブラーフマナは学生と同じ誓戒を守るか月齡祭（cāndrāyaṇa）を行う（11.118）。破

戒の学生については様々な清めの手段がある。すなわち、夜、四辻で、調理祭（pākayañña）の規則に従い、片目の驢馬をニルリティ神³²⁾に献供すべし（11.119）、供物を火に投じた後讃歌を唱えて、風神ヴァーユ、インドラ、ブリハस्पティ及び火神アグニに酥油を献供すべし（11.120）、献供される驢馬の皮をまとい、自らの行為を告げながら七軒を乞食して歩くべし、それらの家から得た施物によって一日一回食事を取り日に三度の沐浴をすると一年を経て清められる（11.123,124）などである。ブラーフマナによる下位ヴァルナ殺しの贖罪については、クシャトリヤを殺した場合にはブラーフマナ殺しの贖罪の四分の一とされ、ヴァイシャ殺しの場合は八分の一、シュードラ殺しは十六分の一に軽減される（11.127）。動物を害する時、すなわち、猫、犬、蛙、蜥蜴、鳥などを殺したときはシュードラ殺しの誓戒を行うべし（11.132）。ブラーフマナが骨を有する生き物を殺すときの清めの手段は布施で、骨なしの生き物の場合は制息に留まる。

禁食であるスラー酒を知らずに飲んだときは再度の清めの儀式（入門式）によって清められ、意図的に飲むときは死ぬまで清めは宣告されない（11.147）。また、再生族は知らずに糞尿あるいはスラー酒に触れたものを食したときは、再度、入門式を行うべし（11.151）とされる。すなわち、罪を犯したことによりダルマ世界から逸脱した人でも、再度入門式を受けることにより清められ、ダルマ世界への再加入が許された。

<本来的に不浄とされるもの>

特定の行為や罪によるものではなく、以下のような本来的に不浄とされるものがある。身体から出る十二のマーラ（mala：脂、精液、血液、ふけ、小便、大便、鼻汁、耳垢、痰、涙、目やに及び汗）は不浄とされ、これらは土あるいは水で浄化される（5.134）。また、シュードラは常時不浄と看做され、毎月頭を剃り、再生族の残飯を食すこと（5.140）と定められるように、ヴァルナの中では上位三身分である再生族とシュードラとの間には顕著な格差が存在した。

<清浄を保つために行う清め>

特定の行為などにより不浄となった人が清めを行う以外にも、通常の人や事物でも儀式や供犠の前に清浄を保つために清めの行為が必要とされた。

誓戒を守り学生生活を完遂した学生は水を献じることにより、学識ある者は寛容で、禁制の行為を犯した者は贈物で、罪を秘せる者は聖句の低唱で、心汚れた女は月経により、ヴェーダを知る最高の人間は苦行により、それぞれ清められる（5.88, 5.107）。また、河川は流れによって、人の手足は水によって、心（manas）は真実によって、人間の本体（ātman）は学問と苦行によって、判断力（buddhi）は知識によって清められる（5.108-109）。

これらの規定は、古代インドにおける社会的慣習ないし倫理観が反映されたものであって、心、判断力、河川などの抽象物や自然も対象とされることが特徴的である。

また、身体の清めを欲する者は、最初に三度水を啜り、次いで二度口を拭うべし、女及びシュードラは両方を一度ずつでよい（5.139）と規定され、ここでも女性の地位はシュードラと同一視される。

<器物等に対する清めの手段>

金属や木製品、液体・固体、供犠用の容器や道具類、皮・樹皮・貝・骨製品、野菜・果実、薪・藁、あるいは家や地面など、様々な生活用具類が浄化の対象として挙げられている。これらは概ね土や水などによって清められるが、土と水以外では、家や地面は牛糞の塗布により清められ、毛布はアリシュタカの実³³⁾で清められた（5.110-126）。今日の宗教儀式においても類似した清めの行為が見られる。

<本来的に清浄なもの>

本来的に清浄なものとして、祖霊 (3.192)、王 (5.93)、誓戒を遂行中の学生 (5.93)、職人の手 (5.129)、女の口 (5.130) などのほか、果実を落とすときの鳥、母牛の乳を飲んでいる子牛、鹿を捕まえるときの犬 (5.130) などが列挙される。また、特に、蠅、水滴、影、牛、馬、太陽光線、塵、地面、風、火については触れても清浄である (5.133)。祖霊が清浄とされるのは、先祖を尊ぶ精神文化を背景とする。また、王が清浄な理由は、王はインドラの座に座し、世界の八守護者³⁴⁾の姿を有しているからである。以上はバラモン全盛のヴェーダ時代から、クシャトリヤの支配によるダルマストラの時代への移行による価値観や社会慣行の変化を背景としている。さらに、クシャトリヤに定められた生き方 (kṣātradharmā) に従って、戦闘中に武器によって殺された者の供犠は即座に成就する (5.98) と述べられ、武士が戦場で死ぬことは美德とされた³⁵⁾。

<清めと関連する禁止事項>

ブラーフmanaは入門式を行っていない上位三身分の者たちとの結婚が禁止される (2.39-40)。これは入門式が男性の人生にとって最も重要な清めの儀式に当たるからである。また、ブラーフmanaの死体はシェードラが触れることにより天界への到達が妨げられるのでこれを禁止している (5.104)。さらに、異教徒に加わった女、墮胎した女、スラー酒を飲む女等の不浄な人々への献水も禁じられる (5.90) が、これは清浄であるべき儀式を汚れから守ることが意図されていると考えられる。

5. 結語

ヴェーダの世界では祭式中心のダルマの観念が中核に据えられていたが、紀元前およそ六世紀から紀元前後にかけて成立したダルマ世界では浄の維持と不浄の排除は社会生活の深層部を支配し、今日の信仰と生活実践を一体化したヒンドゥー教社会にまで踏襲されてきた³⁶⁾。『マヌ法典』は法律書ではないが、百科全書の様相を帯びており、ヒンドゥー教世界に特有の社会制度、法律、倫理道德体系の原型となっている。

当時のダルマの世界においては、再生族は清められることによって生きる権利が付与される一方、親族の死や不浄なものとの接触あるいは罪を犯すことにより汚れたものはこの世界から排除された。しかし、こうした汚れや罪は不浄な付着物と同一視されて、清めの行為により浄化され再びダルマの世界への復帰が許された。ダルマの世界に属さなければ、ヴェーダの学習や祭式儀礼も行うことができず、あらゆる社会的資格の停止を意味した。同時に、清浄の確保と維持は死後の世界にも好ましい結果をもたらすと信じられていた。このように清めの行為は社会制度の中核に存する最も重要な儀式であったと言える。

しかし、浄・不浄の価値観はヴァルナ間で同一ではなく、清めの儀式や不浄である期間などの規定は異なる。とりわけ、上位三身分とシェードラ (11.132) との格差は顕著である。シェードラは常時不浄な立場に置かれ、ヴェーダを唱えることも聞くことも許されなかった。これはインドに侵入し征服したアーリヤ人と土着の被征服民族との関係を踏襲したものであろう。

上位三身分の中ではブラーフmanaは絶対的な特権を保持する。ヴェーダが究極の権威であり、ブラーフmanaはヴェーダに精通するがゆえに世界の規準となることが謳われている (11.85)。ブラーフmanaにとって天職を全うすること、すなわち、ヴェーダを学び、教え、祭式を行い、神々に供物を捧げるために浄であることは絶対条件であった。

ブラーフmanaの犯す罪に対して、王はブラーフmanaに死を命ずることはできないだけでなく、ブラーフmanaの殺人罪は、相手の身分が低くければ、それだけ軽減された。また、近親者の死による不浄期間につ

いても格差が設けられ、ブラーフmanaは十日と最も短く、階層が下がるに従って長く設定されている。

クシャトリヤに関しては、特に王のダルマ、とりわけ、王の職務の一つである訴訟の審理について多くの紙面を当てている。審理の結果、王によって罰せられた者たちは汚れから解放され、善行をなした善き人々と同じように、天界に到る(8.318)ことができるのである。

また、女性及び入門式を終えていない子どもの社会的地位も低く、一般にシュードラと同格に位置づけられた。ここにもブラーフmanaを中心とした男性社会の一断面が窺える。

また、アーシュラマに関しては、警戒を守っている学生は無条件に浄であるとされるほか、四住期の中では社会的に最も重要な任務を担う家長は、排尿・排便後の清めの行為などにおいて他のアーシュラマとの格差が設けられていた。家長が他の住期の人々の日常生活を支えていることがその理由である。

出産は両親の罪を受け継いでいるため不浄とされる。これを清めるため、胎児に対する火の供物の献供、誕生式、結髪式の諸儀式を行い、最終的には入門式によって両親の罪は完全に除去される。子どもはヴェーダの中に生まれない限りシュードラと同格で、ヴェーダを唱えることも許されていない。入門式が上位三身分の男子にとって第二の誕生と呼ばれる所以である。

『マヌ法典』は、当時の社会秩序を形成し維持してきた支配層であるブラーフmana及び王に関する行動規範や生活の在り方に焦点を当てているが、罪とその汚れの除去についても詳述する。罪の概念は幅広く、犯罪に相当するものからダルマの世界の道徳的規範に違反することによる罪をも含んでいる。ただ、罪を償うという観念は存在せず、罪は汚物や不浄物と同様に一時的な付加物で転移するものであって、従って、何らかの手段を用いて除去されなければならなかった。こうした詳細で複雑な規定は、長年に亘る安定した社会の維持を背景として築かれてきたものであり、また、同時にヴァルナ間の差異を拡大し固定化させてきた。

『マヌ法典』の記述によれば、古代インドにおいて清浄を確保し維持することは、不殺生、真実、不盗、感官の抑制とともに、四身分に共通の正しいダルマであり、これらの遵守が成就の要件である(10.63)。さらに、清めの儀式的究極的なねらいとして、積極的に浄の世界を追求することによって、現世における永遠の幸福を獲得し(4.149)、死後においては恐ろしい輪廻の世界を逸脱し天界に到達すること(5.104)が可能となる。

浄を中核としたダルマ社会ではこれまで見てきたように様々な清めの手段が考えられている。代表的なものは、日常生活における朝夕のサンディヤーであり、外部要因による汚れや罪に対しては沐浴・ヴェーダ復唱・苦行などであるが、これらの清めに関する細かい規定は古代インドにおける成就の条件であると同時に、ヴァルナ体制をより堅固なものとしており、インドの階級社会の閉鎖性・排他性を象徴するものに他ならない。

註

○引用あるいは出典の詩節番号に付した原典名の略号は各々、MS：『マヌ法典』、YV：『ヤージュニャヴァルキヤ法典』、RV：『リグ・ヴェーダ讃歌』を示す。ただし、本文中に記載した『マヌ法典』の詩節番号にはMSを省略した。

1) 渡瀬信之「ブラーフmanイズム社会の形成 —Dharmasūtra において見られるヴァルナ体制の思想」(『文明』50, 東海大学文明研究所, 1987, pp. 5-25) では「古代から伝承されてきた宗教を垣間見ると、私たちの浄の希求に関する思いと行動は洋の東西を問わず共通する部分が多くあり、これは人類の

- 普遍的な本性と考えられる。」と述べている。
- 2) 中村元『インド史Ⅰ』中村元選集決定版第5巻(春秋社,1997) p. 20。また,杉山二郎編集解説『インドの美術』グランド世界美術第4巻(講談社,1976) pp. 107-108にはモヘンジョダロの大沐浴場跡の写真とともに,「沐浴場は紀元前 3500 年から 1500 年頃の間建設・使用されたもので,長さ 12 m,幅 7 m,深さ 2.4 mの総煉瓦造り,両側から階段で入れるようになっている。インダス文明人は宗教儀式の際に罪や穢れを祓い清めるためにこの浴槽を使用した」と記す。
 - 3) J. ゴンダ著,鎧淳訳『インド思想史』(岩波文庫,2002) pp. 10-11.
 - 4) 田中雅一によれば,Louis Dumont の見解として,「身体への一時的な汚染はカースト上の恒久的な汚染と本質的に異なるものではなく,浄・不浄の観念はカースト制度の中心的役割を演じてきた」ことを紹介している。(For a Sociology of Hinduism: A Critical View of Holism, "Zinbun" 24 (1989) pp. 295-296.)
 - 5) 渡瀬信之「法典の成立とその思想」岩波講座東洋思想第五巻『インド思想Ⅰ』pp. 111-134,(岩波書店,1988)では,「ヴェーダ」から「ダルマ文献」におけるダルマ観念の発展の背景には,禁欲主義の台頭を挙げている。
 - 6) 井狩弥介・渡瀬信之訳注『ヤージュニャヴァルキヤ法典』東洋文庫 698 (平凡社,2002) 解説 p. 341
 - 7) 渡瀬信之「法典の成立とその思想」岩波講座東洋思想第五巻『インド思想Ⅰ』pp. 111-134,(岩波書店,1988) p. 129
 - 8) 渡瀬信之はこの世界を「ヴェーダ=ダルマ世界」と呼ぶ。(「ヴェーダ=ダルマ世界における罪と浄不浄」『インド思想史研究』7,pp.51-71,1991) 他)
 - 9) 渡瀬信之訳『マヌ法典』(中公文庫,1991) p. 476. に,G. Bühler の推論として成立年代を掲げている。
 - 10) インドのカースト制度は,ヴァルナ (varṇa) あるいはジャーティ (jāti) などと呼ばれる。ヴァルナは「皮膚の色」を意味し,当初はアーリヤ人と原住民の肌の色の差異により区別されたと考えられている。その後,社会的役割の分化や異なる階級間の結婚などにより,細分化されたカーストが生みだされて今日に至っている。
 - 11) リミラ - ターバル著,山崎元一・成沢光訳『国家の起源と伝承 古代インド社会史論』(法政大学出版局,1986) 第二章 pp. 25-95.
 - 12) 辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』(岩波文庫,1970) p. 320.
 - 13) 『マヌ法典』の詩節番号をカッコ内に付記する。引用文及び訳語は主として渡瀬信之訳『サンスクリット原典全訳 マヌ法典』(中公文庫,1991)によったが,このほかに中野義照訳注『マヌ法典』(日本印度学会,1951)及び田邊繁子訳『マヌの法典』(岩波文庫,1952)も参考にした。
 - 14) P.V. Kane, History of Dharmaśāstra, Vol. II, pp. 51-52.
 - 15) 中村元『インド史Ⅰ』中村元選集決定版第5巻(春秋社,1997) p. 155.
 - 16) 女性とスードラの地位の同一視については,たとえば,MS 5.139やYV 1.21 などにも記載がある。
 - 17) アーシュラマについては,P.V. Kane, op. cit., pp. 416-426 を参照。また,渡瀬信之の『マヌ法典ーヒンドゥー教世界の原型』pp. 35-60(中公新書,1990)の他,「Dharmasūtraにおいて見出される Āśrama観」(『東海大学紀要』36,pp. 59-76,1981)にも詳述される。
 - 18) このダルマーストラは Āpastamba Dharmasūtra を指す。(P. V. Kane, op. cit., p. 416)
 - 19) 家長,学生及びムニについては,『リグ・ヴェーダ』にも現れており,ダルマーストラより古い時代か

ら存在した。また、遍歴者 (yati) については、ヴェーダ時代よりもさらに古く、非アーリヤ人の呪術に起源を持つと考えられる。ただし、それらはいずれも人生の段階を意味するものではなかった。(P. V. Kane, op. cit., pp. 418-420)

- 20) 四住期最後の遍歴者に相当するサンスクリット語には parivrājaka の他 ,parivrāt, bhikṣu, muni, yati などがある。
- 21) 渡瀬信之「古典期ヒンドゥー社会のアーシュラマとカースト」『文明』36, (東海大学文明研究所, 1982) p. 8
- 22) サマーノダカ親族 (samānodaka) は、献供の水を共有する親族のことで、親族間の関係あるいは名前がわからなくなったところで終わる。
- 23) サピンダ親族 (sapinda) は、祖霊に対する供物としてピンダ (団子) を献供する資格を有する親族で、通常七代で終わる。
- 24) 結髪式 (cūḍākarma) は一年目あるいは三年目の幼児期に行われる。
- 25) 人生における最も重要な清めの儀式 (saṃskāra) として、上位三身分の男性には入門式が、また女性には結婚式が挙げられる。
- 26) ヴェーダ支分はヴェーダの解釈と祭式の執行のための補助学で、音声学、文法学、祭式及び行動の規範、語源学、韻律学及び天文学の六種の学問を指す。
- 27) 井狩弥介・渡瀬信之訳注『ヤージュニャヴァルキヤ法典』p. 307
- 28) 『マヌ法典』記載の罪については、渡瀬信之「ヴェーダ＝ダルマ世界における罪と浄不浄」(『インド思想史研究』7, 1991) pp.51-71 及び小谷汪之『罪の文化－インド史の底流』(東京大学出版会, 2005) pp.27-36 に詳述される。いずれも不浄である罪は実体的に捉えられ、伝染するものであり、その排除が清めの中で最重視されていたことを力説する。
- 29) 古代インドの叙事詩などでは贖罪に要する期間としてしばしば 12 年が現れる。たとえば、『マハーバーラタ』では、賭博に負けて都を追放されたパーンダヴァ兄弟が森で過ごした期間が 12 年であり、また、聖仙ヴァシシュタは、食人鬼にとりつかれたカルマーシャパーダ王から鬼を払い落として 12 年にわたる苦しみから救い出した。
- 30) 馬祀祭 (asvamedha) は古代インドで行われていた祭祀のひとつで、国王の絶大な権力を示すために催す国家的祭典。この儀式は絶大な清めの効力を持つとされた。
- 31) パティタ (patita, 墮姓者) は重罪を犯したことにより正統なダルマの世界から脱落したしものこと。パティタになるには、儀式を行って彼らの浄を奪い、社会的にも彼らを排除・差別した。一方、パティタからダルマ世界への復帰の道も残されていた。(MS 11.183-191)
- 32) ニルリティは「死」の意味で、死を神格化した女神。(菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂出版, 1985)
- 33) アリシュタカはムクロジのこと。日本でも古来、ムクロジの実は石鹼の代用品として利用されてきた。
- 34) 八守護者とは、月神、火神、太陽神、風神、インドラ、富の王、水の王、ヤマを指す。(MS 7.4)
- 35) 武士が戦場で死ぬことが清く尊いものであることは、『バガヴァッド・ギーター』の主題でもある。
- 36) 現代ヒンドゥー社会の浄・不浄については、たとえば、井狩弥介他 (座談会)「ヒンドゥー世界における浄・不浄の概念」(『岩波講座 東洋思想第七巻インド思想3』pp.237-262, 岩波書店, 1989) などにも紹介される。